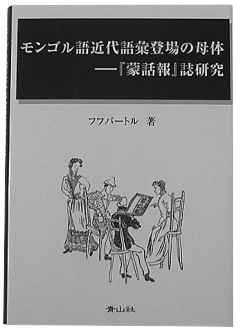
フフバートル著

『モンゴル語近代語彙登場の母体
―『蒙話報』誌研究』

橘　誠

『モンゴル語基礎文法』、『続モンゴル語基礎文法』の著者として知られるフフバートル氏の研究成果が刊行された。本書はフフバートル氏が一九九七年に提出した学位請求論文「漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成―中国領内のモンゴル語定期刊行物発達史に沿って―」の第二章、第三章を基にして、新たな資料、分析を加えたものである。書名が端的に示す通り、本書のメインテーマは、『蒙話報』に現れる中国語からの翻訳語彙がモンゴル語近代語彙の母体になったという点にある。

本書は、四章からなる第一部と『蒙話報』の目次内容の第二部、『蒙話報』に現れるモンゴル語近代語彙のモンゴル語・中国語対訳一覧と中国語ピンイン索引の三部、そしてまえがき、あとがき、参考文献より構成される。以下、本書の内容を順に紹介していき、本書に対する若干の感想を付け加えたい。



2012年2月29日発行
青山社
A5判　260頁
定価 4952円（本体）

第一部第一章は、主に『蒙話報』という現時点で利用可能な最も古いモンゴル語定期刊行物についての紹介である。『蒙話報』は、光緒三四（一九〇八）年四月十五日に創刊された「蒙漢合璧」の雑誌である。ここでいう「蒙漢合璧」とは、モンゴル語一行につき中国語一行の対訳が付いているものを指すが、実際にはモンゴル語の方が中国語の翻訳であり、しかもそのモンゴル語は中国語を参照しなければ理解が困難という代物である。このような雑誌が刊行された背景には、列強の進出に対する政治的プロパガンダをモンゴル民衆の間に広めるという清朝の目的があったが、「蒙漢合璧」は漢文化の強い影響下にあった内モンゴルであればこそ成立し得た体裁であり、漢文化がそれほど浸透していなかった当時の外モンゴルではまず不可能であった。

本誌は、発行部数が七〇〇部と、当時のモンゴルの識字率を考慮すれば相当な数が発行されていたことになるが、第一期から第二十五期のうち第八期と第二十四期を除く二十三冊を日本の東洋文庫が所蔵するほかは、内モンゴルやペテルブルクに数期分の所蔵が確認されるのみの極めて希少な雑誌となっている。フフバートル氏がモンゴル語の近代化において特筆すべき存在と見なす翻訳者については、詳細は分からないものの、雑誌上に全て名前が掲載されているため、今後の手掛かりになるであろう。

第二章は、中国国内に所蔵されている『蒙話報』に関連する雑誌四冊についてのフフバートル氏の調査報告である。本章では、内モンゴル自治区図書館所蔵の『蒙話報』第七期の写本と第二十七期、上海図書館所蔵の第三十三期、吉林省档案館所蔵の『蒙文報』について触れている。

本章では、各地での調査結果から重要な指摘がなされている。まず、内モンゴル自治区図書館に所蔵される『蒙話報』の写本の存在が『蒙話報』の性格を知る上で重要な資料となること、すなわち、これは読者のニーズを明らかにする上で参考になるということである。第二十七期については、その発行年月の推定から、『蒙話報』が「毎月一回発行」ではなく、一・七カ月に一期の発行頻度であったことを指摘している。また、第三十三期の所蔵が確認されたことにより、『蒙話報』のモ

ンゴル語名が民国以降に mongyul üge-yin bodurul から mongyul üge-yin sedgül へと変更されたことが裏付けられ、また編集陣営には大きな変化が生じていないことも明らかになった。そして、『蒙文報』「第弍百零弍期」の分析からは、これが『蒙話報』を継続するものであると推測し、『蒙文報』が少なくとも一九二〇年代末までは発行されていた可能性を指摘した。また、内モンゴル図書館に所蔵されていたとされる第八期が消息不明であることを確認している。このように、『蒙文報』のために各地を巡るフフバートル氏の研究対象に対するこだわりの態度には見習うべきものが多い。

第三章では、現在利用できる『蒙話報』全二十五冊一八六〇ページから近代語彙八八四語を抽出し、これを政治・経済・人文・自然・教育・社会・その他に分類の上、『蒙漢合璧五方元音』（一九一七年）、『蒙譯名辭選輯』（一九四二年）、『漢蒙詞典』（一九八二年）と比較した。

フフバートル氏の定義では、近代語彙とは西洋の近代文化と関係のある語彙であり、特定の時代の語彙を意味しない。そして、『蒙話報』における中国語の近代語彙を見出し語として二字複合語を中心に集計し、これがいかにモンゴル語訳されているか分析した。結果としては、時代が下るにつれて見出し語の一致率は増加するが、『蒙譯名辭選輯』と比べ『漢蒙詞典』ではその訳語の一致率が低下するということである。これは、一九四〇年代初期までは用いられていたモンゴル語の訳語が次第に淘汰されていったことを示しているという。

最後に、第四章では、『蒙話報』の外国語固有名詞のモンゴル語表記を同時代のモンゴル語資料、具体的には、モンゴル語訳『万国公法』や「モンゴル新聞」、「新しい鏡という書」などの新聞、「国家の権利」や「諸外国の概況」といった翻訳書と比較した。初期のモンゴル語表記では、中国語の発音により国名が記され（例えばイギリスは ing ulus）、より正確な発音を期すために満洲文字が用いられていたが、次第にモンゴル文字のみの表記となり、後には現在の表記法（anggili）に近づいていったという指摘がなされる。

第二部の『蒙話報』の目次内容は、『蒙話報』に掲載された内容を知ることができるため、翻訳語の問題だけではなく、当時の歴史研究にも大いに役立つ。蒙古実業公司や満蒙貿易同志会などの記事を読んでみたいと思う人は少なくないであろう。また、第三部のモンゴル語・中国語対訳一覧と中国語ピンイン索引からは、フフバートル氏が本研究に捧げた労力が窺われる。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきた。まず何よりも、モンゴル語近代語彙がいかに誕生したのかという重要な問題について、本書が先駆的業績であることは疑いない。実際に、『蒙話報』に現れその後定着した語彙を見ると、普段何気なく使っている語彙ではあるが、なるほど中国語の二字複合語の訳であることがよく分かる。モンゴル語話者であってもそのことに自覚的である人は多くはないのではなかろうか。その一方で、同じ中国語でもあっても『蒙話報』内でも異なる訳語が当てられるなど、初期における訳語は翻訳者に左右されるところが大きかったことになり、翻訳者は既出の訳語を参照していなかったのか、訳語は共有されていなかったのかなどの疑問も生じる。また、リストには挙げられていないが、現代モンゴルで ул хөдлөх хөрөнгө（動かない財産）とされる「不動産」などは、明らかに中国語からの翻訳語である。このような異なる媒体で創造されたと思われる近代語彙もいまだ数多く残されており、それらの語彙がどのようにして誕生したのか、今後のさらなる資料の収集、分析が期待される。いずれにしても、本書が今後研究されるであろう数多くの問題への扉を開いたことは疑いない。

（たちばな　まこと　早稲田大学非常勤講師）